まだ運転したい人、もう運転させたくない人は必読

週刊現代別冊
オールカラー
完全保存版

おとなの週刊現代

本体
815円(税別)
講談社MOOK

Weekly Gendai Extra Issue

2019 Vol.4

オールカラー

高齢ドライバーとその家族に知っておいてもらいたいこと

ドライブレコーダー連続解析
人身事故、その決定的瞬間

走り慣れた道で信号見逃し。きっかけは些細なことだった
「運転ミス→パニック→大事故」の現場

事故で教え子を喪った尾木ママが、72歳で免許返納を決断するまで

ドキュメント逆走／免許返納の手続き

「一度の事故がどれだけの苦しみを生むか、私は気付いていなかった」
事故を起こした当事者たちの告白

高齢ドライバーとその家族
一家丸ごと「事故破産」

全部保険でなんて思ったら大間違い

を起こした の告白

これは他人事じゃない」

ゴールド免許だったのに

「毎日のように報道される交通事故のニュースで、加害者は『何が起きたかわからない』と話します。皆さんは『わからないはずないだろ』と思うでしょうが、いまの私にはその気持ちが痛いほど理解できます。本当に何も覚えていないのです」

茨城県に住む81歳の高木節子さん（仮名・女性）は、昨年2月下旬、ショッピングセンターの敷地内で、運転する軽自動車で60代と40代の女性、歩行者二人を撥ねてしまった。

高木さんは目に涙を浮かべながら、自らの過ちを悔やんだ。

「施設の屋上にある駐車場に入るため、右折待ちの坂道の途中で停車したことは覚えています。前には2台の車がいて、そのうちの1台が曲がって駐車場に入った後、時速20kmほどのスピードで進みました。

そこで前の車にぶつかりそうになってしまい、ハンドルを切った後、ブレーキを踏むつもりがアクセルを踏んでしまったようなのです。でも、本当にその瞬間の記憶がありません。気づいた時にはすでに人を撥ねていて、自動販売機にも衝突していました。前方不注意も事故の原因です。歩行者がいることにさえ、まったく気づきませんでした……」

81歳の高木さんだが、健康状態には自信があり、75歳以上が免許更新時に受ける認知機能検査もスムーズに通過した。日常的に運転をしながら、ゴールド免許だった。それでもさすがに加齢とともに運転能力が鈍ってきている恐れを感じて、安全運転を意識的に心がけ

毎日のように高齢者による交通事故が発生し、世間を騒がせている。このニュースをシニア世代や老親を持つ家族は、呆然と眺めるだけではいけない。真剣に免許返納を考えるきっかけにする時だ――。

78歳の元東京地検特捜部長も、87歳の元通産官僚も「人殺し」に

事故当事者たち

「高齢ドライバーに告ぐ、

今年4月、東池袋で発生した事故の現場

ていた。にもかかわらず、事故を起こしてしまった。

高木さんは現行犯逮捕されたが、高齢であったため、すぐに保釈された。その後、在宅起訴され、執行猶予付きの判決を受けた。

「被害者お二人のうち、60代の女性の方は脳挫傷を負ってしまい、いまも治療なさっています。とにかく無事に回復してほしい。

その被害者の方にはまだ会えていません。まずお電話したのですが、ご家族の方から『今後は一切、電話しないでほしい』と言われてしまいました。私は静かにすることしかできません。ご家族の方からは厳しい言葉をいただきました。この事故は私が趣味である絵を描くための材料を買いに行った時に起こしてしまったものです。そのため、『趣味くらいで他人の人生を狂わせて』と。被害者の方のご主人は70歳を迎えた時に運転免許を返納されていたそうです。それもあって、ご家族からは『80歳なのになぜ返納しなかったのか』とも言われました。私には返す言葉もありません」

決断するなら、とにかく早いほうがいい。

今年の10連休明けの5月7日～9日の3日間だけで、東京都内で1200人以上が運転免許を返納している。これは普段の2倍の数にのぼる。

そのきっかけは4月19日、東京・東池袋の交差点で発生した痛ま

しい事故だ。元通産官僚の飯塚幸三氏（当時87歳）が運転するプリウスが暴走し、8人を次々とはね、自転車に乗っていた松永真菜さん（31歳）と長女の莉子ちゃん（3歳）が死亡した。原因は車が縁石に乗り上げて飯塚氏がパニックとなり、アクセルとブレーキを踏み間違えたことだと見られる。

飯塚氏は東京大学工学部卒で、通産官僚の技術職トップと言われた工業技術院長まで上り詰めた人物だ。退官後は大手農機メーカーのクボタで要職を歴任。'00年に副社長を退任すると、東京・板橋区の新築分譲マンションで妻と二人、趣味の音楽鑑賞を楽しみながら悠々自適の生活を楽しんでいた。体力の衰えから、80代後半はゴルフから遠ざかっていたが、車の運転は止めていなかった。

元千葉県警交通事故捜査官で交通事故調査解析事務所代表の熊谷宗徳氏は、この事故についてこう指摘する。

「東池袋の現場に行くと、少し縁石に乗り上げ、そこから加速していることがタイヤ痕から分かりました。縁石に乗り上げた状況を瞬時に判断できず、ブレーキではなく、いつも行っているアクセルを踏む行為に繋がってしまった可能性が高いと考えられます。

高齢者は自分の意識より足が動かせておらず、ブレーキを踏んだつもりでアクセルを踏んでしまうこともありえます。さらにブレーキを踏んでいるはずなのに速度が上がっている状況もすぐに理解することができない。

通常、危ないと思ってブレーキを踏むまでは0・7から0・8秒だと言われています。それが高齢者の場合は1秒以上もかかってしまう。それだけに事故が起こりやすい傾向にあるのです」

80代でも交通刑務所へ

飯塚氏は怪我を負って入院していたが、事故から約1ヵ月後の5月18日に退院している。逮捕はされておらず、今後は在宅起訴され、公判を迎える見通しだ。交通事故に詳しい犯罪被害者支援弁護士フォーラム事務局長の高橋正人弁護士が語る。

「罪状は過失運転致死傷罪。お二人が亡くなっていることを鑑みれば、2年から3年の実刑になる可能性があります。以前ならば、死亡者が一人で、加害者が80歳前後の場合は、執行猶予が付くのが通例でした。

しかし、高齢ドライバーによるアクセルの踏み間違え事故が多すぎるため、一昨年ごろから実刑判決が出るケースが増えています」

元エリート官僚は交通刑務所で晩年を過ごすことになるかもしれない。

昨年2月には、かつて東京地検特捜部長も務めた大物弁護士、石川達紘氏（当時78歳）が運転する高級車・レクサスLS500が暴走する事故が起きている。

歩道に立っていた37歳男性が撥ねられて死亡。車を降りる際に誤ってアクセルを踏んだことが原因であると、石川氏は過失運転致死罪などで在宅起訴された。だが、石川氏側は裁判で「事故は自らの過失ではなく、車の異常」と無罪を主張していく方針だという。

「被害者家族とは昨年6月に示談が成立しています。石川さんは弁護士の仕事は、いまはほとんどしていません

が、毎日、事務所に通勤。免許はまだ返納していないものの、バスと電車を利用しているそうです」（知人）

本誌は石川氏を直撃取材し、自ら起こした事故についての見解を聞いた。

「私が左足でアクセルを踏んだとされていますが、絶対に踏んでいないというのが私の主張です。右足がドアに挟まったまま、左足で300m以上もアクセルを踏み続けることは考えられません。

私はこれまで年間2万km以上運転してきて無事故でした。ただ、判決次第で運転免許は返納します。詳しくは話せませんが、裁判ではとにかく体験に基づいて事実関係を克明に説明することに尽きます」（石川氏）

自分でも「なぜ事故を？」

事故の詳細はこれから法廷で明らかになっていくが、飯塚氏、石川氏はともに頭脳明晰で、そして自らの運転に自信を持っていた。そんな彼らの車が、未来ある若者を「轢き殺し」てしまった。

高齢者の運転能力を研究する山梨大学大学院教授の伊藤安海氏が語る。

「高齢ドライバーを調査すると、本人の運転能力の自己評価と実際の運転能力が反比例していることが多い。つまり自己評価を信じることは非常に危険なのです。危惧されるのは、免許を返納される方が増えていますが、その方たちは普段から慎重に運転している自己評価の低い高齢者が大半だということ。事故を起こしやすい自己評価の高い方の返納は進んでいないのです」

石川氏が運転するレクサスは金物店に突っ込んだ

自分だけは大丈夫と思っている高齢ドライバーほど、事故を起こしてしまうのだ。

「事故後の事情聴取で警察官に『なぜ踏み間違えたのか』と聞かれましたが、答えようがなかった。その瞬間のことを本当に覚えていないのです」

苦渋に満ちた表情で本誌にそう語る、埼玉県在住の金子隆一さん（73歳・仮名）も高齢者による交通事故のニュースをまったくの他人事だと思っていたという。金子さんは'16年12月、コンビニの駐車場で、アクセルとブレーキを踏み間違え、車が店のガラスを破り店内に突っ込む事故を起こした。その際、レジと車に挟まれた10代の男性店員に重傷を負わせてしまった。金子さんが続ける。

「これまで警察のお世話になるような事故を起こしたことはないです。私はそのコンビニで毎日のように買い物をしていましたから、駐車に戸惑ったこともありません。だからこそ、自分でも『なぜ？』という思いがいまも消えません。

自分では実年齢よりも若いつもりでいました。でも、いま思えば、その日の体調によっても、判断力が鈍くなる

ことがあったのかもしれません」

金子さんにはコンビニ側から休業補償も含めて約1100万円もの請求があったという。さらに怪我を負った被害者には治療費など約270万円の支払いを行った。

「対人対物がともに無制限の自動車保険に加入していたので、被害者の方への補償の面で金銭的にご迷惑をかけることはありませんでした。これは本当に不幸中の幸いでした。もし保険が不十分だったらと考えるだけでゾッとします。ただ当然のことですが、怪我をした店員さんには許してもらえませんでした。入院先の病院にお見舞いに行ったのですが、一切口もきいてくれなかった。こちらとしてはとにかく詫びるしかなかった。辛い時間でした……」

東池袋の事故現場は連日献花が絶えなかった

くどうちあき脳神経外科クリニック院長の工藤千秋氏は、「高齢者は免許を返納すべきだ」と断言する。

「たとえ認知症でなくても、運転能力の低下は避けられません。高齢者は免許を返納すべきなのです。神経の伝達のスピードが落ちていく。そして筋肉自体の反応も遅れる。だから、ブレーキを踏まないといけない状況でも、1~2秒遅れるんです。たとえ脳が元気であっても筋肉の老化、骨の老化が事故につながります。また、若い人と比べて高齢者の方はパニックになりやすい。それは動脈硬化が原因で、老化現象なのです。だからいくら認知機能のテストが合格であったとしても、ブレーキとアクセルを瞬発的に踏み替える力が落ちていると感じたら、自主返納を考えてほしいです」

早く返納していれば……

前出の伊藤教授も言う。

「車庫入れが手間取るようになった、カーブで対向車線にはみ出す、左車線ギリギリを走ってしまう、そうした場合は、車の位置を把握できておらず、運転能力が確実に落ちている証拠です。同様に歩行者や標識の見落としを同乗者に指摘される機会が増えてきた方も運転能力が低下していますので、免許返納のタイミングでしょう」

冒頭の高木さんはいま、後悔の日々を送っている。

「事故の後、免許は返納しました。もともと更新の時期に合わせて、昨年のうちに免許を返納するつもりだったんです。もっと早く返納していれば……この年齢でこんなことになってしまうなんて……。でも、私はまだ生きなくてはいけない。主人が認知症を患い、施設に入っているんです。いまの私にできることは被害者の方が一日でも早く回復するように毎日、仏様にお願いすることだけです」

人生の最後を穏やかに過ごすために、なにをすべきか。「死ぬまで運転したい」という思いを一度、考え直し、真剣に免許返納を考えることが大事なのではないだろうか。